南四国における旧石器・縄文期の文化様相

木　村　剛　朗

（幡多埋蔵文化財研究所）

1．緒　　言

南四国における旧石器時代は約２万年前の後期旧石器時代〔第四紀後期更新世〕から始まる。そして，それらの遺跡はかっては西南部に集中していたが，現在では中央部や東部地域からも発見され，不明であったこの時代の様相が十分とは言えないまでも，実体がほぼ明確になりつつある。また，縄文期においても新発見遺跡の急増と，発掘調査が進んだことにより新資料が倍増し，この時代に関する研究が飛躍的に進展した。それらの成果には目をみはるものがある。折から高知大学において「第四紀における高知県の環境変遷－自然環境と考古学遺跡の変遷史－」というタイトルで招待講演に招かれたので，後期旧石器時代から縄文時代にかけての近年の成果を踏まえてここに述べる。

表１．南四国における後期旧石器遺跡一覧表

遺跡No.	遺　跡　名	遺　　物	遺跡No.	遺　跡　名	遺　　物
1	中　駄　場	ナイフ形石器	15	楠　　山	ナイフ形石器、台形様石器、スクレイパー、礫器
2	池　ノ　岡	ナイフ形石器、細石核	16	広 井 駄 場	細石核
3	坂　　本	翼状剝片、尖頭器	17	平 野 茶 園	国府型ナイフ、翼状剝片、細石核ブランク（船野型）
4	和　　口	国府型ナイフ、角錐状石器、翼状剝片石核、翼状剝片	18	双海中駄場	翼状剝片石核、翼状剝片、ナイフ形石器、角錐状石器
5	深　　泥	ナイフ形石器	19	双海本駄場	角錐状石器（？）
6	中　　屋	ナイフ形石器	20	八　　足	削器、細石核（？）
7	宇 須 々 木	ナイフ形石器	21	影　野　地	ナイフ形石器、掻器剝片
8	竜　ヶ　迫	ナイフ形石器	22	竜（りゅう）	ナイフ形石器
9	ﾅｼｹ森第1地点	細石核、角錐状石器、スクレイパー、石核	23	奥　谷　南	ナイフ形石器、角錐状石器、スクレイパー、細石刃、細石核ブランク、尖頭器
10	ﾅｼｹ森第2地点	ナイフ形石器、角錐状石器、石核	24	高間原古墳群(1号墳)	細石核
11	池　　田	角錐状石器	25	新 改 西 谷	ナイフ形石器
12	鉾　土　越	ナイフ形石器	26	ｲﾊｻｷ・ﾀｲﾉｳﾁ	掻器
13	フキノ谷山	ナイフ形石器	27	佐野楠目山	ナイフ形石器、台形石器、角錐状石器、石核
14	池　ノ　上	国府型ナイフ	28	永 野 長 岡	台形様石器
			29	大　　内	翼状剝片

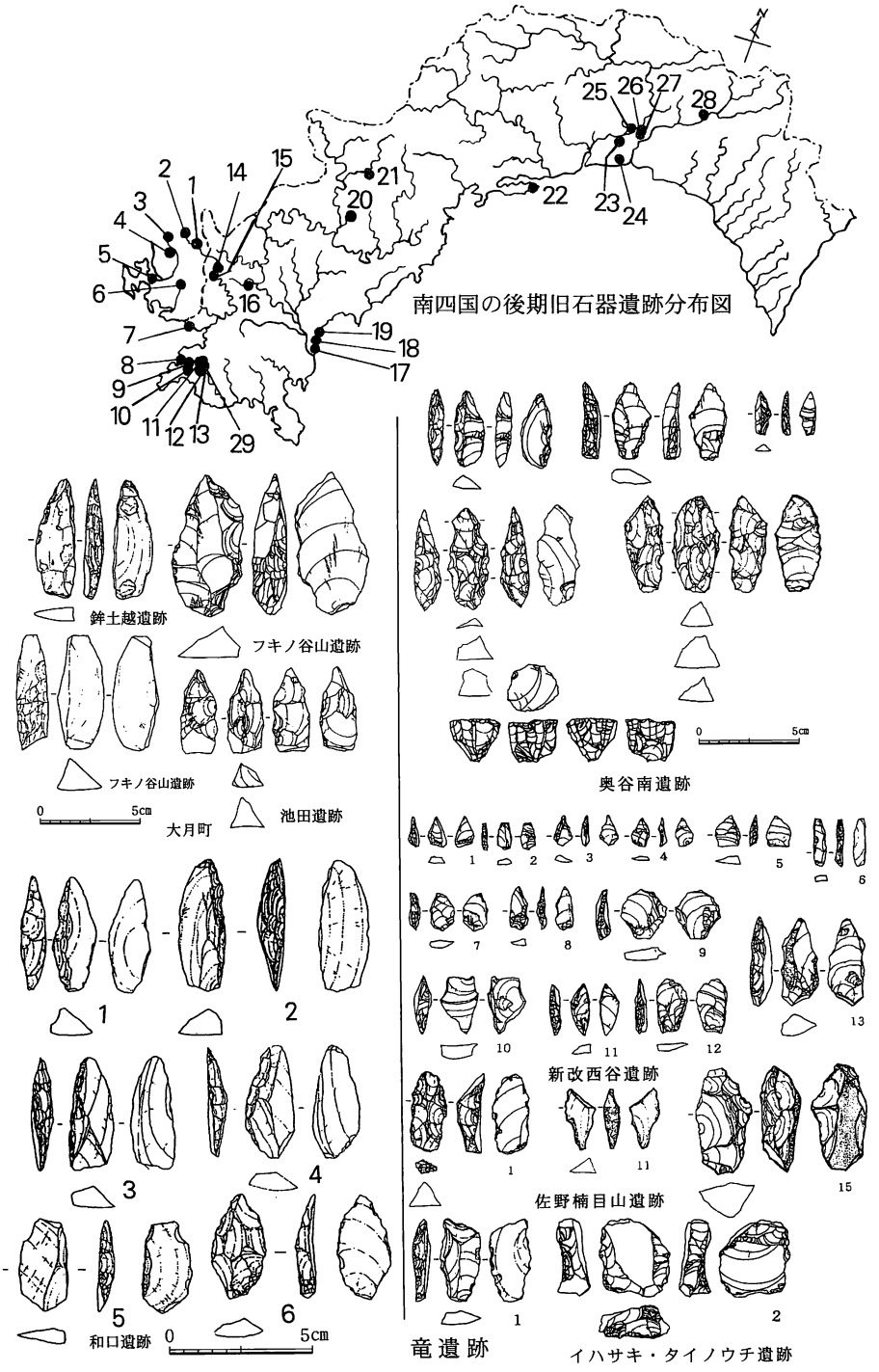

図１．南四国の後期旧石器遺跡分布と出土石器

2．後期旧石器時代

筆者の調査によれば，四国西南部では後期旧石器時代の遺跡は現時点で29箇所を数える。この時期の遺跡は西南部に分布が偏在していたが，図１に明らかなとおり，従来は空白地帯であった東部からの新たな遺跡発見が増加し，その様相の一端が明確になりつつある。特に，大量の遺物を出土した奥谷南遺跡[1)]の内容が光り，東部での中心的遺跡となっている。

その出土遺物で代表的なナイフ形石器は，大部分が長さ５㎝未満の中型のもので占められ，しかも縦長・横長剥片を素材とし，岩質はチャート製が主流をなしているのが特徴となっている。また，角錐状石器を伴うのも大きな特徴である。このパターンは，周辺に分布する遺跡出土の遺物から明らかなように，ほぼ同様の内容を持って踏襲されている。ただ，新改西谷遺跡[2)]の場合は，遺物から見る限り，ナイフ形石器は小型化し，その様相を異にする。その特徴としては奥谷南遺跡のナイフ形石器に比べてやや新相を呈し，編年的には筆者の編年の第３段階に該当する[3)]。奥谷南遺跡のナイフ形石器・角錐状石器を含め，これらは筆者編年の第２段階のものとみて大過ない。

西南部においても近年，前田光雄氏によって大月町内において良好な資料が発見されている[2)]（図１左上段）。ナイフ形石器３点は長さ５㎝を超し，一側縁加工であり，２点が横長である。他の１点は縦長剥片を素材とする。角錐状石器も１点含まれているが，これは縦長剥片素材である。これらの特徴からみて，これは奥谷南遺跡の資料（ナイフ形石器・角錐状石器）と時期的に平行し，第２段階のものとみなされる。また，この時期のものとしては，和口遺跡[4)]にまとまった良好な資料

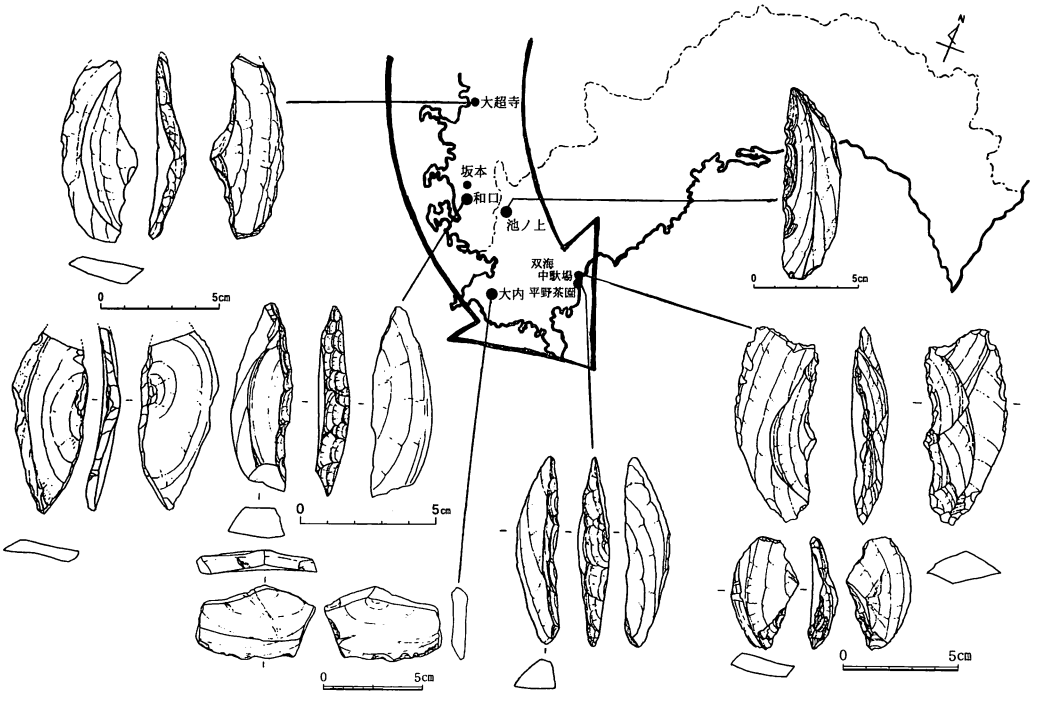

図２．国府型石器文化波及ルートと出土石器

（図１左中央１～４）があり，深泥[5]竜ヶ迫[6]ナシヶ森第２地点[7]・宇須々木[8]・双海中駄場[9]・池ノ岡[10]などからも出土が知られている。なお，これらの大部分は横長剝片素材であり，石質は大月町で発見された新資料を含めて全てが頁岩である。

第３段階に編入される資料については，西南部では和口[4]（図１左下段５・６）・中駄場[9]・梶郷駄場[3]・ナシヶ森第２地点[7]にわずか認められる程度であり，現在のところは本段階の資料の出土に乏しい。

ところで，筆者編年の第１段階と設定したのは，近畿・瀬戸内地方で盛行した国府型ナイフ形石器を指す。本タイプ石器の出土分布は和口遺跡を中心として西南部にのみ限られる（図２）。現在確認されている遺跡は７箇所で，中でも前述の和口は群を抜き国府型ナイフ，翼状剝片はそれぞれ100点を優に超し，その石核も数10点が得られているなどのように国府型タイプ石器を出土する拠点的遺跡となっている。遺跡の分布状況からみると，国府型ナイフ形石器文化は，豊後水道沿いに西南部を南下し，太平洋岸へと波及している。これらの遺跡の分布地域は良質頁岩の産地となる地域である。この石器素材として適した頁岩に恵まれていたことが後期旧石器人を本地域に引き付け，さらに発展させた要因と推考する。

ナイフ形石器文化について，第１段階から第３段階までの概要を述べてきたが，第３段階終焉後に後期旧石器終末の細石刃文化期を迎えることになる。この時期を代表するのは奥谷南遺跡[1]であって，大量の遺物を出土している。細石核は野岳・休場型・船野型，さらに瀬戸内系の羽佐島技法によるものなどがみられる。西南部では備讃瀬戸内系のものが少数みられるものの，その主体は九州系の船野型で占められている[11]。終末期においても石器の岩質は，東部がチャートであるのに対し，西南部では頁岩を主体としている。

３．縄 文 時 代

縄文期の黎明を告げる草創期の遺跡は10箇所余りが数えられるが，これらは先行する旧石器遺跡の分布域に重なって出現している（図３）。すなわち，これは旧石器人がそれぞれの地域に定着し，この時期を迎えたことに他ならない。そして，その周辺で早期文化が開花して発展している。次に，これは前・中・後・晩期と変遷するが，縄文遺跡を総括的に概観すると，集中分布域が西南部・中央部・東部に３大別できる。最も密度の高いのが西南部で，次いで中央部であるが東部では低く，いわゆる西高東低のパターンを示している。（図４）。

縄文草創期では旧石器時代からの生活を踏襲し，狩猟と植物質食料の採取を主体とし，狩猟には槍先形尖頭器・有舌尖頭器・石鏃が用いられ，弓・矢による狩猟が開始された。これは十川駄場崎遺跡出土[12]の尖頭器が示すサヌカイト製石器の出現である。狩猟は早期を迎えてますます盛んとなり，さらに，長徳寺[13]の例から明らかなように，石錘を用いた網漁撈が開始される。また，中・東部では石器にチャートとサヌカイトが，西南部では姫島産黒曜石が多用されるのを特徴とする。この姫島産黒曜石は大多数が石鏃に使用され，前期においても西南部ではその交易は衰えず，早期と同様に顕著な出土がみられる。土器は中・東部が瀬戸内系，西南部は瀬戸内・九州両地方のものが混在して特異な様相を呈する。

中期は良好な遺跡に恵まれず，不明な点を残すものの，土器に見られる限りでは瀬戸内系一色となり，その地方からの卓越した土器文化の波及が看取される。

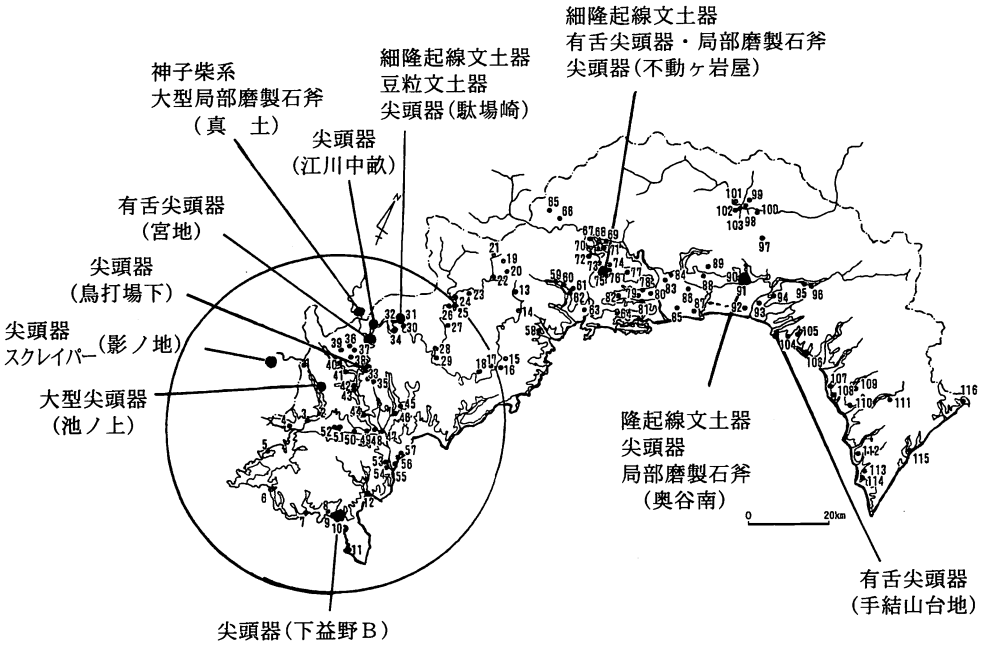

図３．南四国の縄文草創期遺跡分布図

次に後期を迎えることになるが，この時期は縄文期全体を通じて最も繁栄した時期となる。遺跡数も爆発的に増加し，河川・海岸部に大集落遺跡や貝塚が形成される。また，四万十川中流地域の大宮・宮崎遺跡[14]で知られるとおり，配石遺構や石棒・線刻礫を伴う大規模な祭祀遺跡が出現するなど，人口の増加に伴う複雑化した社会背景の中で，精神文化の飛躍的な発達が示される。

出土土器については，後期初頭に純粋の瀬戸内系に属する中津式が南四国全域に広がりをみせ，次の前葉からは西南部と東部とは様相を異にして発展する。すなわち，西南部では宿毛式を祖型とし，三里→平城Ⅱ式→平城Ⅰ式→片粕式→広瀬上層式→伊吹町式→大宮Ｋ式と変遷してローカルカラーの強い土器文化の形成に至る。

宿毛式は松ノ木遺跡[15]で明らかなとおり，東部への波及が認められるものの，その遺跡では次の段階で，口縁端を拡張させて，その面に斜行する連続刻目を多用する特徴的な文様構成を持つものへと変容し，西南部の三里式に対向する松ノ木式の誕生に至っている。松ノ木式の土器内容は四国島内では傑出し，最良を誇るものである。ただ，これがその後どのように変容していったかについては謎であったが，それも近年の調査による資料[16]により，西南四国の平城Ⅱ式に平行する縁帯文土器のまとまった土器の出土があって，不明点が解明されつつある。また，平城Ⅰ式の範疇で理解されている鐘ヶ崎式や片粕式土器も中央部において出土例が増加しているが，これらは西南部からの波及，または，集団そのものの移動によるものと考えてよい。いずれにしても，この後期は狩猟・漁撈共にその活動は旺盛で，特に漁撈はより盛んに行われていたと考えられる。それは，ほとんどの遺跡より漁網用の石錘が出土していることなどからも明確である。中でも西南部の三里[17]，

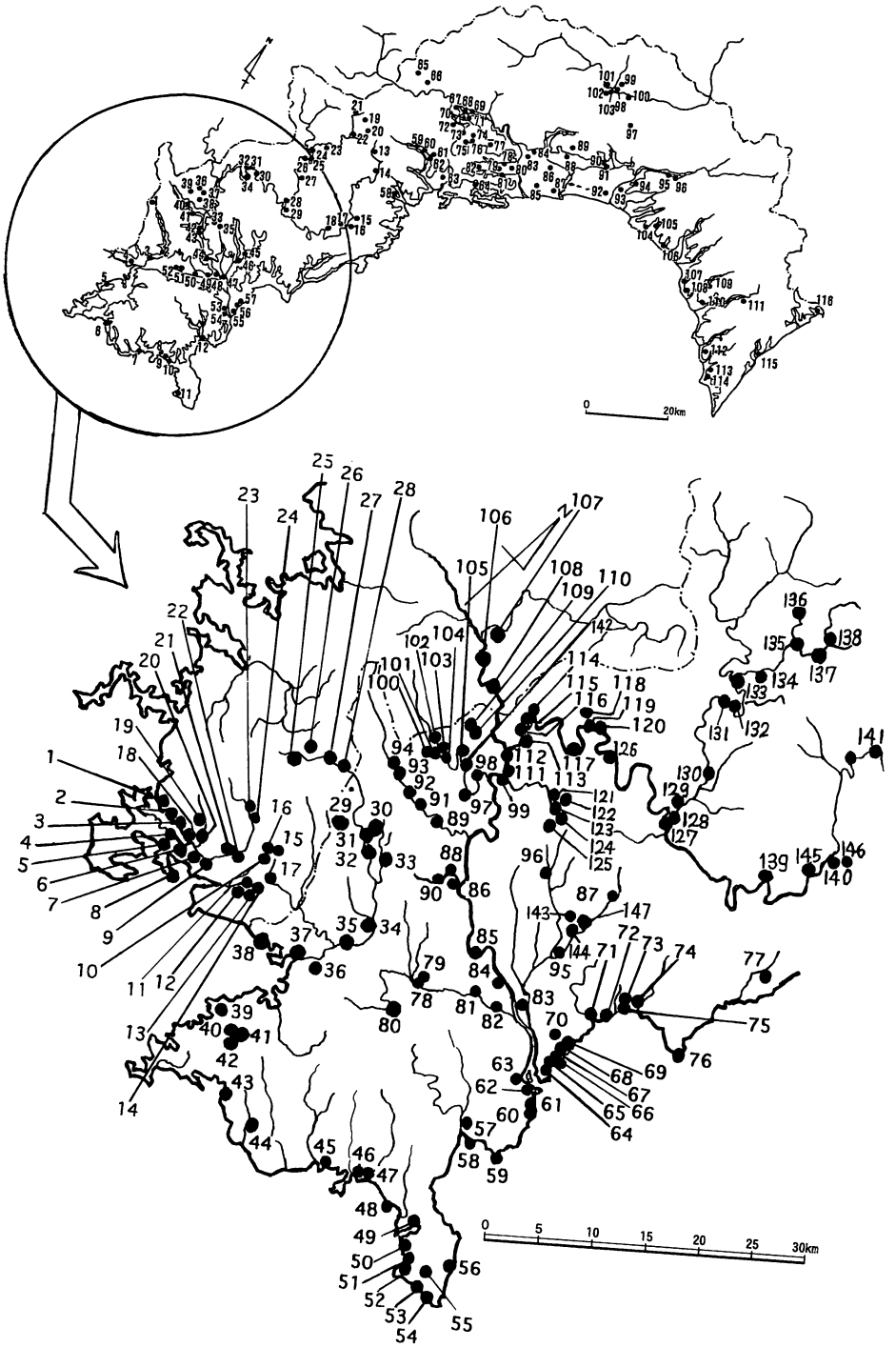

図４．南四国の縄文遺跡分布図（○印，西南部拡大）

東部の松ノ木[16]両遺跡は南四国最多の石錘出土を誇る大規模な遺跡として著名である。

後期における発展は既述のとおり，旺盛な狩猟と漁撈活動を行うことによって豊かな食生活が保障され，そして，縄文人の体内から沸き出るエネルギーとパワーによってその発展へとつながっていったのである。特にその場合，西南部は気候温暖で，木ノ実をつける豊かな森と，アユを筆頭に多種の淡水魚が多く生息する県下最大の四万十川が貫流し，海岸部は魚介類が豊富なリアス式を形成するなど山・川・海の幸に恵まれていたことと，さらに本地域には石器原石となる良質の頁岩が極めて多量に産出することなどが南四国でも最も栄えた要因と考えられるのである。

晩期を迎え，稲作農耕の導入によって生活立地は平野部へと移動し，生業のウエイトは農業主体へと傾倒する。それでも狩猟・漁撈は従来ほどではないまでも，継続して行われている。中村貝塚出土の多数の石鏃と大量の獣・魚骨がそれを如実に物語る[18]。また，居徳遺跡出土の石棒・土偶[19]や中村貝塚出土の石刀[20]入田遺跡出土の石棒などが示すとおり，この時期も後期に発生した祭祀が継続して行われている。

南四国におけるこの時期の遺跡は，前半期には良好な遺跡に恵まれず，実体について不明な点が多いものの，中葉から後葉・終末にかけてはほぼ明らかとなっている。遺跡の分布は，西南部と中央部の２つの地域に大別される。西南部は無刻目突帯を特徴とする中葉の中村Ⅰ式，刻目突帯文を有する後葉の中村Ⅱ式，そして，刻目突帯が口唇部に接して作り出される終末の入田Ｂ式のように，その土器編年が確立している[18]。中村Ⅰ式は東九州の田村上層式に酷似するが，本式土器の内面には１～２条の平行沈線が描かれる特徴を持ち，本地方独自に生成された土器文化の形成がみられる。後葉は瀬戸内・九州両地方からの影響下によって成立し，終末の入田Ｂ式[21]は北部九州の夜臼式土器系のもので，北部九州文化の直接影響下に成立したものとされている。

中央部では倉岡遺跡を筆頭に近年明らかとなった居徳遺跡などの良好な遺跡がみられる。倉岡遺跡の土器資料は滋賀里Ⅲｂ式と突帯文土器である滋賀里Ⅳ式に分けられ，これらが近畿地方からの文化波及によって成立していることが明らかとなっている[21]。このように，晩期における土器文化は，東西がそれぞれ異なる様相をみせ，次の弥生期へと移行するのである。

４．結　　語

以上，四国西南部を中心とし，南四国における旧石器時代から縄文時代までの諸遺跡について概説した。特に旧石器時代については，国府型石器文化の波及は西南部にのみ限定されることを成果として述べた。ただ，本石器文化がどのように東進，拡大を示すかが今後に残された研究課題である。また，筆者の編年による第１段階から第３段階の各期における器種構成の把握，そして精度のより高い編年の確立にも努めなくてはならないであろう。

縄文時代については，繁栄のピークが後期にあったことを記し，その中心地域が西南部に求められることと，発展の背景についても論述した。

いずれにしても，今後とも遺跡と遺物の発見は続くであろうし，それに伴って研究も進展し，新たな実体が明らかとなることであろう。

表２．南四国西南部の縄文遺跡一覧表

遺跡No.	遺　跡　名	遺　　物	遺跡No.	遺　跡　名	遺　　物
1	銭　　坪	後期	37	宿毛貝塚	中・後期
2	貝　　塚	後期	38	宇須々木	中期
3	八幡野	後期	39	ムクリ山	前期
4	深　　泥	早・前・中・後期	40	ナシヶ森第1地点	早期
5	大　　島	早期	41	大駄場	早・後期
6	仙碆鼻	後期	42	ナシヶ森第2地点	前・後期
7	節　　崎	後期	43	尻　　貝	中・後期
8	天嶬鼻	後期	44	カルモカ	草創期
9	久　　保	後期	45	片　　粕	中・後期
10	礼　　掛	後期	46	下益野A地区	後期
11	踊駄場Ⅱ	中・後期	47	下益野B地区	草創期・前・後期
12	踊駄場Ⅰ	晩期	48	松　　崎	中・晩期
13	茶堂Ⅰ	後期	49	ミズクレ	後期
14	茶堂Ⅱ	前・中・後期	50	中ノ浜	後期
15	広　　見	前・中・後・晩期	51	長崎鼻	後期
16	岡駄場	後期	52	新　　浦	後期
17	大　　又	後・晩期	53	沖ノ台	早・前期
18	平城貝塚	早・前・中・後・晩期	54	スボノ口鼻	前期
19	坂　　本	草創期	55	唐人駄場	早・前期
20	和　　口	後期	56	井ノ口	後期
21	下　　緑	後期	57	下ノ加江	後・晩期
22	緑当時	草創期	58	南松原	後期
23	アナガイチ	前期	59	布駄場	早・前・後期
24	梶郷駄場	早・前期	60	名鹿ヌキデ駄場	後期
25	影　　平	草創期・早・前期	61	名鹿ビシヤゴ駄場	後期
26	池ノ岡	早・前期	62	初　　崎	前・中・後期
27	中駄場	前期	63	間　　崎	中期
28	犬　　除	早・前・後期	64	平野茶園	早・前・後期
29	笹　　平	草創期・早・前期	65	磯ノ上	後期
30	五助駄場	早・前期	66	双海東駄場	後期
31	楠　　山	草創期・早期	67	双海中駄場	早・前・後期
32	池ノ上	草創期・早期	68	双海本駄場	早・前期
33	奥　　藤	後期	69	長　　門	後期
34	橋　　上	前・後・晩期	70	小坂口	前・後期
35	二ノ宮	前・後・晩期	71	入　　野	後期
36	正　　和	後期	72	弘　　野	後期

遺跡No.	遺跡名	遺物	遺跡No.	遺跡名	遺物
73	奥駄場	前・後期	111	弘岡	後期
74	小櫛山	晩期	112	宮地	草創期・後期
75	東駄場	後期	113	長生	後期
76	井ノ岬	前・後期	114	大野平	後期
77	カラスデ	後期	115	江川中畝	草創期・早・前・後期
78	有岡ツグロ橋下	晩期	116	本村半家	後期
79	有岡久保畑	晩期	117	広瀬	前・中・後期
80	栂ノ木	後期	118	古城	後期
81	国見	早・前・中・後期	119	川口ホリキ	前・後期
82	船戸	前・中・後・晩期	120	駄場崎	草創期・早・前・後期
83	中村貝塚	晩期	121	堂ヶ市	草創期・早・中期
84	入田	晩期	122	棟屋敷	早・前期
85	三里	中・後期	123	尾崎	後期
86	鳥打場下	草創期・後期	124	白髪山	後期
87	大用	早・前・中・後期	125	胡麻谷	後期
88	踊碆山	後期	126	奈路	早・後期
89	広井駄場	草創期・早・前・中・後期	127	吾川	後期
90	ひろぞう	後期	128	森駄場	草創期
91	下久保	後期	129	江師	早・後期
92	曽我の西	後期	130	木屋ヶ内	早・前期
93	奥屋内本村	後期	131	影地	早・前期
94	城の下	後期	132	庄司ヶ市	後期
95	八幡神社裏山	後期	133	中平	前期
96	シオリダバ	後期	134	影野地	前期
97	小津賀	前・後期	135	下折渡	早期
98	沖	早・前期	136	高野	早・前期
99	平口	後期	137	土居越	後期
100	大宮	前期	138	北川	前・後期
101	大宮・宮崎Ⅰ	早・前・中・後・晩期	139	川口	後期
102	留が奈路	後期	140	根元原	中期
103	上深田	後期	141	船戸	早期
104	大宮・宮崎Ⅱ	草創期・前・後期	142	長崎	早期
105	上籔が市	後期	143	丸山	後期
106	延野々	草創期	144	横谷	後期
107	岩谷	後・晩期	145	仕出原	後期
108	真土	草創期	146	仁井田	前期
109	西クイ原	後期	147	奈路馬場	早・後期
110	車木	早・前期			

引用文献

1）松村信博，2000，高知県奥谷南遺跡の発掘調査と出土資料．第17回中・四国旧石器文化談話会，1－74
2）松村信博・山崎真治，2000，高知県出土の後期旧石器時代新出資料と細石刃文化期の遺跡．第17回中・四国旧石器文化談話会，75－83
3）木村剛朗，1995，後期旧石器時代の文化様相．四国西南沿海部の先史文化，幡多埋文研，877－882
4）木村剛朗，1995，和口遺跡，四国西南沿海部の先史文化．幡多埋文研，37－78
5）十亀幸雄，1983，続・城辺町誌．城辺町，9－11
6）森田尚宏・山本哲也・前田光雄，1994，竜ヶ迫遺跡，ムクリ山遺跡．高知県大月町教育委員会，1－12
7）木村剛朗，1995，ナシヶ森第2地点遺跡，四国西南沿海部の先史文化．幡多埋文研，11－25
8）山口将仁，1975，高知県初出土のナイフ形石器宿毛市宇須々木遺跡．西四図第5号，37－40
9）山口将仁，1989，高知県双海中駄場遺跡出土のナイフ形石器．旧石器考古学38，旧石器文化談話会，175－176
10）木村剛朗，1979，四国西南旧石器・縄文期の新発見遺跡と遺物．土佐考古学叢書，33－43
11）多田仁，1995，四国西南部の船野型細石核．旧石器考古学，51，旧石器文化談話会，85－89
12）山本哲也・岡本桂典，1989，十川駄場崎遺跡発掘調査報告書．高知県十和村教育委員会，1－90
13）岡本健児・前田和男・岡本桂典・井本葉子，1977，長徳寺址発掘調査報告書．高知県長岡郡本山町教育委員会，1－24
14）木村剛朗，1999，大宮・宮崎遺跡Ⅰ．高知県西土佐村教育委員会，1－276
15）出原恵三，1992，松ノ木遺跡Ⅰ・Ⅱ．高知県本山町教育委員会，1－130・1－65
16）前田光雄，2000，松ノ木遺跡Ⅴ．高知県本山町教育委員会，1－385
17）岡本健児・広田典夫・木村剛朗，1978，中村市教育委員会，1－35
18）岡本健児，1968，高知県史考古編．高知県，13－166
19）高知県埋蔵文化財センター，1999，居徳遺跡群現地説明会資料．高知県埋蔵文化財センター，6－8・1－6
20）木村剛朗，1987，四万十川流域の縄文文化研究．幡多埋文研，1－475
21）岡本健児，1989，日本の古代遺跡，39・高知．保育社，1－261